

# 赦し——羊の群れへと連れ戻す道

千葉敏之

ペトロがイエスに問うた。兄弟の罪を幾度まで赦すべきか、と。イエスは答えて曰く、「七の七〇倍までである」（マタイ一八章二二節）、と。七の七〇倍とは、無限を意味する。

中世ヨーロッパの人々の抱く感情に、古代の人々や近代の人々との差異はない。日々の生活で感じる喜怒哀楽は、人類の共通項と言える。これとは別に、歴史社会、文明社会ごとくに異なる感情が存在する。パーバラ・ローゼンウェインは中世社会を「感情の共同体」と呼んだが、この場合の感情は、社会に生きる人々によって共有され、人々を行動へと駆り立てる〈社会的感情〉と理解されている。

こうした公的感情をめぐる研究（感情史）が中世社会について最初に注目したのは、〈怒り〉であった。公的な怒りは権力の不正に対して蓄積され、暴動や蜂起を招いて社会秩序の歪みを修復し、ときには古い構造を打破する力となった。

神の〈感情〉を地上で代弁する教会は、矯正しがたい信徒に対する〈怒り〉を、教会罰というかたちで表現した。

世俗社会と異なり、信徒に対して身体刑を科せない教会の最終手段は、教会からの排除としての破門刑であった。破門を意味するラテン語の *excommunicatio* は、「信徒の交わり」（*communicatio*）からの追放を意味した。その破門の儀式は、呪詛（祝福の真逆）として編成された。教会の堂内を照らす蠟燭は消され、門は閉ざされ、暗闇の中で、聖書中の呪いの言葉を唱えながら、司教たちが手に持つ蠟燭を地面に投じた。かくて破破門者の靈魂には印が刻まれ、信徒との交わりは絶たれ、救いの道である教会に近寄ることさえ禁じられた。

中世社会はしばしば不寛容な社会と形容されるが、破門をはじめとする教会罰はすべて矯正罰であった。罰はすべて赦しに至る贖罪として定められ、罪に応じた多様な贖罪

の道が用意されていた。破破門者は、教会の玄関間で入堂を涙ながらに乞う「涙請」の期間を過ごし、その後、教会の末席でミサや説教を聴講する三年を過ごし、教会内部での跪拜での祈りが認められ、その後も一定期間を経ながら、立礼拝、信徒ミサへの参加が許され、最後に聖餐式への出席の許可をもって、信徒の共同体への回帰が完成する。

ただし、赦しの道に入るには、絶対の条件がある。それは己の罪の自覚とその告白、すなわち痛悔（悔悛 *penitentia*）である。罪ゆえの〈痛み〉を背負った罪人は、上述の破門の手順を踏むことで、信徒の共同体がその罪ゆえに受けた傷を癒し、ふたたび「羊の群れ」に戻された。破門に対する贖罪としてのこの儀礼は、同時に、罪の〈痛み〉を負った破破門者が、〈不安〉を抱えながら贖罪の道を歩み、ふたたび神と交感する〈喜び〉に満たされ、ついには救済の道に戻りえたことに〈安らぎ〉を見出す、感情の旅路でもあった。

冒頭で引用したペトロは、イエス捕縛の場面で、イエスによる躓きの予告の通り、イエスを三度否んだ。イエスの予告を思い出したペトロは「激しく泣いた」（マタイ二六章七五節）とあるが、その涙は弱い自分に対する〈痛悔〉の涙であった。イエスは地上の教会を、あえてこの「躓きの人」ペトロ（岩）の上に築いたのである。

偉大なペトロよ、…ご覧ください、病んだ羊は忠実な牧者の前に横たわって呻き、牧者と羊の主の御前におります。群から離れていた羊は戻り、自分の過ちと不服従に対して、おゆるしを願っています。

中世の贖罪論を確立したカンタベリーのアンセルムスは、罪に苦悶する自身への赦しを、このように、人の弱さを知悉する聖ペトロに祈っている。罪に対する不安の情を、中世の人々は、祈りの言葉に託して天に放った。その祈りが、「羊たち」を見守る聖人、天使、聖母、キリストへと昇り継がれて、至高天なる神に届け、と。

この〈祈り〉こそ、日々の懊悩を和らげ、自らの魂に安らぎ—赦し—の情をもたらす、中世的感情世界の血流ともいうべきコトバであった。

ちば・としゆき 総合国際学研究院教授 ヨーロッパ中世史

## 文献案内

カンタベリーのアンセルムス『祈りと瞑想』古田

暁訳、教文館、二〇〇七年

